

はじめに

本書は、令和2(2020)年度～令和6(2024)年度科学研究費補助金基盤研究(A)「『全国方言文法辞典』データベースの拡充による日本語時空間変異対照研究の多角的展開」(課題番号:20H00015・研究代表者:日高水穂)の研究成果報告書である。以下に本研究の概要を示す。

目的と経緯

本研究は、日本語諸方言の文法を総合的に記述する『全国方言文法辞典』の編纂を目的として、要地方言を統一的に調査するための共通調査項目を策定し、各地方言(標準語を含む)の文法的側面に関する対照研究を行うものである。

すでに、2014年3月に『全国方言文法辞典資料集(2)活用体系』、2017年1月に『全国方言文法辞典資料集(3)活用体系(2)』、2018年3月に『全国方言文法辞典資料集(4)活用体系(3)』、2019年3月に『全国方言文法辞典資料集(5)活用体系(4)』、2022年3月に『全国方言文法辞典資料集(7)活用体系(5)』、2024年3月に『全国方言文法辞典資料集(8)活用体系(6)』を刊行し、以下の要地方言の活用体系記述を行った。

『全国方言文法辞典資料集(2)活用体系』

岩手県盛岡市方言	竹田晃子
秋田県由利本荘市本荘方言	日高水穂
山梨県甲府市方言	吉田雅子
富山県富山市方言	小西いずみ
岐阜県岐阜市方言	山田敏弘
滋賀県長浜市方言	酒井雅史
京都府京都市方言	松丸真大
大阪府方言	野間純平
山口県東周防方言	船木礼子
福岡県福岡市方言	平塚雄亮
沖縄県那覇市首里方言	仲原穰
沖縄県宮古島市平良下里方言	中本謙

『全国方言文法辞典資料集(3)活用体系(2)』

山形県山形市方言	竹田晃子・澤村美幸
茨城県水海道方言	佐々木冠
群馬県藤岡市方言	新井小枝子
東京都方言	三井はるみ
石川県能登島方言	野間純平

静岡県湖西市方言	森勇太
愛知県新城市作手方言	山田敏弘
兵庫県神戸市方言	酒井雅史
岡山県岡山市方言	小島裕将
広島県三次市方言	小西いづみ
高知県宿毛市方言	松丸真大
大分県由布市庄内町方言	松田美香
鹿児島県甕島里方言	平塚雄亮
沖縄県多良間島方言	下地賀代子

『全国方言文法辞典資料集(4)活用体系(3)』

宮城県仙台市方言	武田拓
福島県福島市方言	半沢康
千葉県南房総市三芳方言	佐々木冠
福井県大野市方言	松倉昂平
鳥取県倉吉市方言	野間純平
島根県出雲市平田方言	平子達也・友定賢治
愛媛県松山市方言	久保博雅
長崎県佐世保市宇久町方言	門屋飛央
鹿児島県鹿児島市方言	平塚雄亮

『全国方言文法辞典資料集(5)活用体系(4)』

東京都八丈島三根方言	三樹陽介
新潟県魚沼市方言	吉田雅子
長野県茅野市方言	大西拓一郎
和歌山県田辺市龍神方言	西尾純二・澤村美幸
香川県高松市方言	乙武香里
佐賀県武雄市北方方言	原田走一郎
沖縄県竹富町黒島方言	原田走一郎

『全国方言文法辞典資料集(7)活用体系(5)』

北海道北見市常呂町岐阜方言	朝日 祥之
滋賀県湖東方言	逸民 誠
愛媛県大洲方言	宮岡 大
福岡県柳川市方言	松岡 葵

『全国方言文法辞典資料集(8)活用体系(6)』

岐阜県高山市方言	山田敏弘
長崎県雲仙市南串山町鬼池方言	野田智子・東出朋
沖縄県宮古市久松方言	陶天龍
沖縄県与那国方言	目差尚太

本書はこれに引き続き、本土方言 6 地点の活用体系の記述を行うものである。本書の要地方言の記述は、田附敏尚氏（①青森県五所川原市方言）、坂本薫氏（②神奈川県大和市方言）、三樹枝里氏（③新潟県新潟市方言）、松倉昂平氏（④福井県坂井市三国町安島方言）、野田太暉氏（⑤岐阜県中津川市方言）、松田美香氏（⑥大分県日田市天瀬町方言）に、各氏のフィールドとする要地方言の記述を依頼した。各執筆担当者の原稿を一貫した記述方針のもとに整える作業は小西いずみ氏（④⑥）、竹田晃子氏（①）、平塚雄亮氏（⑤）、三井はるみ氏（②③）が行い、本書の全般的な編集作業は日高が行った。

本書には、この「要地方言活用体系記述」に加えて、「基本例文 50 要地方言訳」の報告原稿も掲載した。「基本例文 50」は、日本語の基本的な構文と文法形式（助詞・助動詞類）を含む 50 の例文である。「要地方言活用体系記述」が、述語の文法カテゴリーの記述を行うものであるのに対し、「基本例文 50 要地方言訳」は、格やとりたてなどの名詞句の文法形式を含む方言例文を記録することで、活用体系記述を補完することを企図している。読み上げ音声の収録も行っており、検索システムを搭載した用例データベースとして以下のサイトで公開している。

方言文法研究会（第 2 サイト）

<https://sites.google.com/view/hogenbunpo/>

本研究の母体である方言文法研究会は、2001 年に以下の方針のもとに活動を開始した。

- ・方言の文法に関する記述をより精密なものにする。
- ・全国方言の文法形式、文法現象をできる限り網羅する。
- ・言語の対照研究に興味を持つ人全般に向けて情報発信する。

本研究会の最終目標は、上にも述べたように、『全国方言文法辞典』を成すことである。本研究会のこれまでの研究成果は、以下のウェブページにおいて公開している。

方言文法研究会（第 1 サイト）

<http://hougen.sakura.ne.jp/>

最終的な『全国方言文法辞典』を成すためには、より広く諸方言の情報を収集していく必要がある。今後とも多くのご教示をいただきながら、本研究を進めていきたい。

研究組織

研究代表者：日高 水穂

研究分担者：青木 博史 井上 文子* 大西拓一郎 小西いずみ
 小柳 智一 酒井 雅史 下地賀代子 高木 千恵
 竹田 晃子 中本 謙 仲原 穰 野間 純平
 林 良雄 平塚 雄亮 船木 礼子 前田 直子
 松丸 真大 三井はるみ 森 勇太 矢島 正浩**
 山田 敏弘 吉田 雅子***

*2021 年度から

**2021 年度まで

***2023 年度から

研究協力者：田附 敏尚 坂本 薫 三樹 枝里 松倉 昂平
野田 太暉 松田 美香

ここには、今期の科研メンバーと本書の要地方言の記述担当者のみを掲載するが、本プロジェクトは、この他の多くの研究協力者の参加を得て進めている。

本科研の開始時にあたる2020年の春以来、長引くコロナ禍を経て、オンラインによって構築されたネットワークにより、「要地方言活用体系記述」や「基本例文50要地方言訳」といった研究会のプロジェクトに、協力者を募って原稿依頼をする形が取れるようになった。こうした「参加型」の調査資料の整備は、全国を俯瞰する方言研究を進めるためには、非常に有効なものである。今後もこのネットワークを活かした研究交流・資料整備を進めたい。

交付決定額（配分額）

2020年度：10,660千円（直接経費：8,200千円、間接経費：2,460千円）

2021年度：8,710千円（直接経費：6,700千円、間接経費：2,010千円）

2022年度：8,580千円（直接経費：6,600千円、間接経費：1,980千円）

2023年度：8,580千円（直接経費：6,600千円、間接経費：1,980千円）

2024年度：8,190千円（直接経費：6,300千円、間接経費：1,890千円）

2025年3月

日高水穂